

グラファイト-K層間化合物の超伝導

京大理 小林本忠 上川郁二

1. 目的

本研究の目的は、 α /ステージグラファイト-K層間化合物について種々のグラファイト素材を用い、またK濃度を変化させて炭化率にあらわれる超伝導特性のこれらに対する依存性を明確とし、超伝導機構を探ることにある。かような目的をもつに至る動機としては、(1)これらの層間化合物のいろいろた物性は著しく母体とするグラファイトの種類に依存していること、(2) α /ステージと β ステージと γ ステージといえは $C_{24}K$ と化学量論的組成のものも多く、論文でみなされておられ、勿論、そのよき組成となる合成条件のもとに合成されていなければ、組成の確定がなされていまいことなどを省みることにある。

2. 実験方法

母体となるグラファイトとして、(1)粉末状熱分解グラファイト^{上. 野}、(2)グラファイト、(3)高配向性熱分解グラファイト H.O.P.G. (Union Carbide社, grade ZYH; C面の配向性が $\pm 5^\circ$ 以内にとらっているもの)、(4)H.O.P.G. (" " " ZYA; C面の配向性が 1° 以内にとらっているもの)の4種類を用いるが、主に用いるのは(3)のグラファイトであり、その場合以下はよくは断らない。

組成式 C_xK とあらわすと、 $x = 8.0, 8.1, 8.7, 9.0$ の試料は図1(a)の封管を用いて、グラファイトの温度 T_G 、カリウムの温度 T_K を $300^\circ C$ としてえたものである。 $x = 8.0, 8.1$ の試料は文献にある C_8K の合成条件として5日間反応させたものである。また $x = 8.7, 9.0$ の試料は5日間にちぢめて反応させたものである。 $x = 9.4, 14.7, 16.7, 21.6$ の試料は^{図1(b)の封管を用いて} T_K と $280^\circ C$ に保ち、図2に示すように T_G と T_K の間に温度差をつけ5日間反応させたものである。これらの試料合成条件は文献にある C_8K と $C_{24}K$ の合成条件の中間にあるものとみなしうる。 x の値は分析というにはおこがましいことであるが、グラファイトを反応させた後の重量増加より求めた。天秤誤差は ± 0.001 、組成誤差は $x \leq 9.4$ の試料に対しては $C_{x \pm 0.05}K$ 、 $x \geq 14.7$ の試料に対しては $C_{x \pm 0.2}K$ である。

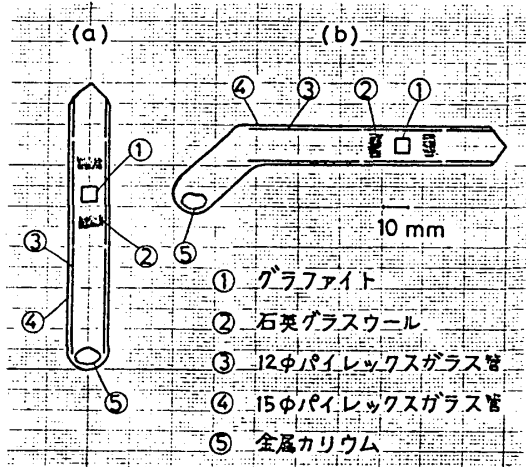


図1 試料合成用封管

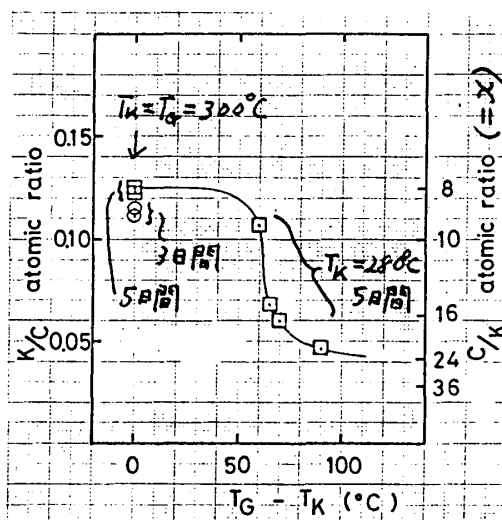


図2 合成条件

これらの試料は同時に購入した $12 \times 12 \times 2 \text{ mm}$ の HOPG のブロック 2 コをそれぞれ $6 \times 6 \times 0.5 \text{ mm}$ の大きさのもの 4 コに分割し、一方の 4 コから $x = 8.0 \sim 9.0$ 、他方の 4 コから $x = 9.4 \sim 21.6$ の試料を合成したものである。外観は $x = 8.0 \sim 9.0$ の 4 コの試料については金色で色調の相異は認められず、 $x = 9.4 \sim 21.6$ の 4 コについては銅色と赤い青色であるが、 $x = 9.4$ のものが最も銅色で、 $x = 21.6$ のものが最も青色である。これに対応して X 線回折では前者はオノステージだけからなり、後者はオノステージとオニステージないしさらに高ステージの混在したものであることが確認されている。

磁化率の測定は断熱消磁法によって 60 mK までの温度範囲で Hartshorn ブリッジ法によって行った。

3 実験結果

磁化率の温度変化の測定例として、 $C_{8.1}K$ について磁場が層に垂直の場合の実際の磁化率 χ の磁化率 χ' のものを示す。図中の H_m は測定磁場の振幅とある。低温側の一定となっている χ' が完全反磁性のものとみなされる。これとして χ' が完全反磁性の χ の値の $1/2$ の値をとる温度をとる。先して H_m をゼロ磁場に外挿して、 $C_{8.1}K$ の場合 $T_c(0)$ として 152 mK とある。 $T_c(0)$ の K 濃度依存性を示す。 $T_c(0)$ は $x = 8.0 \sim 9.4$ の範囲内で 152 mK と一定であり、 $x = 14.7$ では 147 mK とやや下り、 $x = 16.7$ 以上では 60 mK 以下になっている。

$C_{9.4}K$ の場合の $\chi'_{g\perp}$ と $\chi'_{g\parallel}$ の外場依存性を示す。微分帯磁性効果 DPE と過冷却現象が認められ、 H_c^{\perp} は熱力学的臨界磁場、 H_c^{\parallel} は過冷却臨界磁場を示す。 $C_{9.0}K$ と $C_{8.1}K$ の $\chi'_{g\perp}$ の場合も同様で DPE が認められる。 $C_{9.0}K$ の外場が層に平行の場合の $\chi'_{g\parallel}$ と $\chi'_{g\perp}$ の外場依存性を示す。 DPE は認められず、 H_c^{\parallel} はオニ臨界磁場を示す。 $C_{8.1}K$ の $\chi'_{g\parallel}$ もほぼ同様であるが、 $C_{9.4}K$ の $\chi'_{g\parallel}$ においては DPE が観測される。 $C_{9.4}K$ の場合外場が層に垂直でも平行でもともに DPE が存在するが、われわれの知る限りでは層状超伝導体で始めてのケースである。

$C_{9.0}K$, $C_{8.1}K$, $C_{9.4}K$ に対する H_c^{\perp} と H_c^{\parallel} の温度依存性をそれぞれ示す。ここで H_c^{\perp} と H_c^{\parallel} は外場が層にそれぞれ垂直と平行とある。 H_c^{\perp} は H_c^{\parallel} とみなされ、 $H_c^{\perp} = 1.695 H_c^{\parallel}$ と関係づけられる。 DPE を示す $\chi'_{g\perp}$ 対 H 曲線から、 H_c^{\perp} は直接示され、 H_c^{\parallel} は

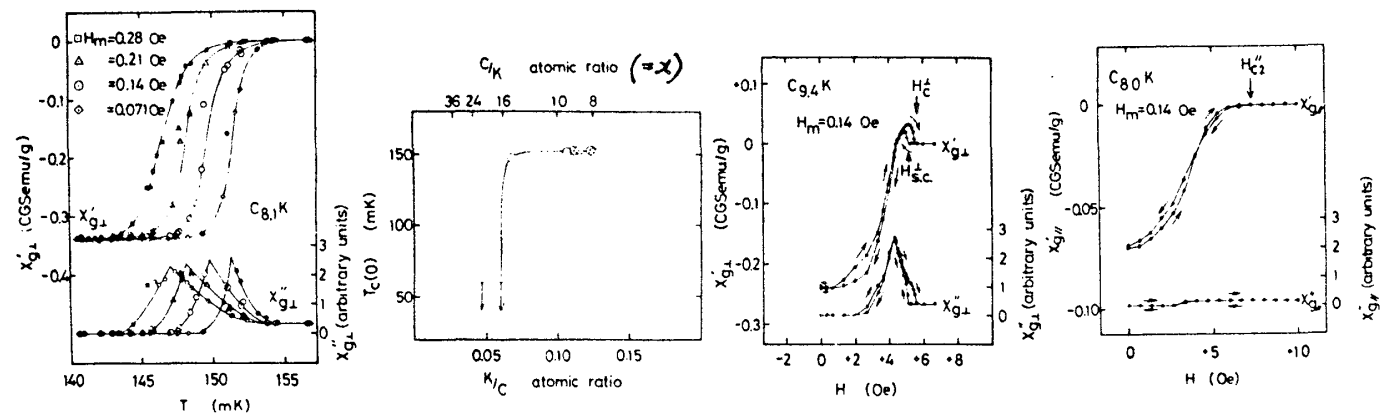


図3 $C_{8.1}K$ の χ' の T 依存性 図4 T_c の K 濃度依存性 図5 $C_{9.4}K$ の $\chi'_{g\perp}$ の H 依存性 図6 $C_{9.0}K$ の $\chi'_{g\perp}$ の H 依存性

H_{sc} から計算されたものである。 H_{c2} 対 $T/T_c(0)$ 曲線は $C_{80}K, C_{81}K$ に対しては正の曲率、 $C_{94}K$ に対してはほぼ線型である。 H_{c1}, H_{c2} 対 $T/T_c(0)$ 曲線は $C_{80}K$ に対しては正の曲率、 $C_{81}K$ に対してはほぼ線型で、 $C_{94}K$ に対しては負の曲率をもつに至る。

4 議論

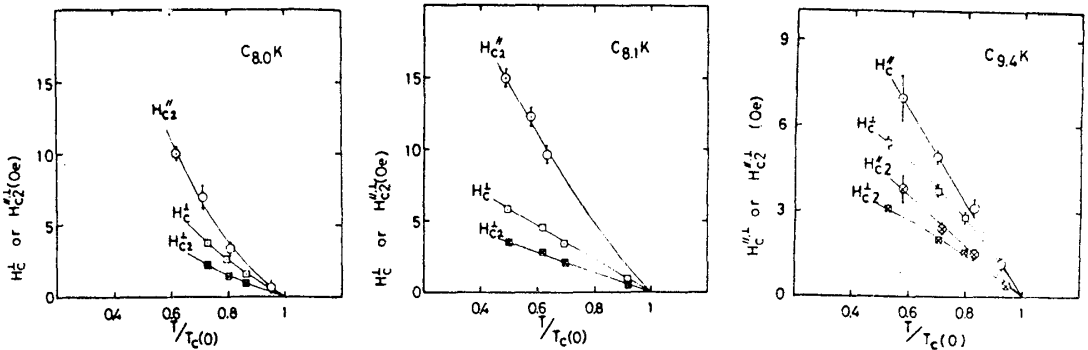
以上の述べたように、 T_c は $x=0.0 \sim 1.0$ のK濃度範囲内でK濃度にはほとんど依存しない。この実験事実からみると、K-like band は x によって著しく変化する筈で超伝導の担い手はK-like bandと 考えにくい。一方、graphite (G)-like band は x によって著しく変化しない筈であり、そこでK層からG層への電子移動給量が何らかの機構によって変らない、すなわちG-like bandでの $N(E_F)$ が一定とすると上記の実験事実は理解できようである。すなわち超伝導の担い手はG-like band とする方がかなり考えやすい。なお T_c はグラフアイトの種類に依存し、 $P_G(1)$ から合成した $C_{81}K$ では $80 mK$ 、グラフオイル(2)から合成した $C_{86}K, C_{88}K, C_{94}K$ ではほぼ一定で約 $125 mK$ 、またHOPG(4)から合成した $C_{81}K$ では $162 mK$ である。したがって、 T_c グラフアイトの結晶性がよくなるほど上昇しており、上記の考え方を支持しているであろう。このことについて後にさらにふれることにする。

要方的G-L理論とかような層状超伝導体にも適用できるとすると、 H_{c2} と H_{c1} の比より凝縮材のそれぞれ層に平行と垂直方向の運動に対する有効質量 $m_{||}$ と m_{\perp} の比が求まる。 $m_{\perp}/m_{||}$ の値として、 $C_{81}K$ に対して 9.3 、 $C_{94}K$ に対して 1.1 がえられた。これよりK濃度がへるとより3D的になるといえる。なお小池代らの C_8K に対する $m_{\perp}/m_{||}$ の値は $1/3$ であった。

層状超伝導体について、外場が層に平行の場合には、 H_{c2} 対 T 曲線の曲率と次元性の関係を検討したKB-L理論があり、また外場が層に垂直の場合には、 H_{c1} 対 T 曲線の曲率を検討したYoungnerらの理論がある。層状超伝導体についてかような理論的検討はなされていないけれども、その場合にも以上の理論を適用してみると、3節にのべた H_{c2} 対 T 曲線の曲率のK濃度依存性から、K濃度の大きい試料ではより2D的であり、K濃度の小さい試料ではより3D的であるといえることができる。

酸化率の T_c 直上の超伝導ゆらぎに関しては、磁場が層に垂直の場合に層状超伝導体に対するAslamazovらの理論がある。 χ_{\perp} の超伝導ゆらぎを $\Delta\chi_{\perp}$ とし、 $T = (T - T_c)/T_c$ とすると、 $\ln(-\Delta\chi_{\perp})$ 対 $\ln T$ 曲線の勾配が $-1/2$ は3D性であることを、 -1 は2D性であることを、 χ_{\perp} の

温度依存性の実験結果から、 $C_{81}K, C_{94}K, C_{147}K$ に対する上記曲線を、グラフオイルから合成した $C_{86}K$ のものとともに、文10図に示す。



ここで、 $\Delta\chi_{\perp}$ は、文7図 C_8K の H_{c1}, H_{c2} のT依存性、文8図 $C_{81}K$ の H_{c1}, H_{c2} のT依存性、文9図 $C_{94}K$ の H_{c1}, H_{c2} のT依存性

$\Delta \chi'_1 = \chi'_{g1} - \chi'_{gn}$ とみなしう。 χ'_{gn} は常伝導状態における χ'_g である。この図からわかるように勾配が -1 よりゆるやかなすなわち多かれ少かれ $3D$ 的である温度領域は、 $C_{49}K$ の方が $C_{20}K$ の方がより広くなっており、またグラフオイルから合成した試料でもない。このことから、 K 濃度がへると $3D$ 性がふえること、またグラフオイルを用いた方が $HOPG$ を用いた場合より $3D$ 性が大きいことがわかる。

以上のように凝縮材の有効質量、 Hc_2 に対する曲線の曲率、超伝導ゆらぎ、いづれの検出からとも K 濃度がへるとともに $3D$ 性がふえることと結論できる。

さて従来超伝導の担い手は K -like band と解釈されてきた様子である。その根拠としては常伝導状態での $\sigma/\sigma_0 = 100 \sim 1000$, Hc_2 の角度依存性などから実験的に異方的 $3D$ と考えやすいこと、また $C_{24}K$ や C_6Li で超伝導が見出されないこと、一方理論的には K -like band は $3D$ 的であり、 $C_{24}K$ や C_6Li では $3D$ 的バンドがなくなること、またフォノンモード、電子-フォノン相互作用などの検出結果があげられる。われわれの結果はこれと相反するものであつて、もう少し検出を進めてみる。その結果を図11に示す。 f は K のイオン化率で従来種々の実験が $f = 8$ の場合、 $f = 0.3 \sim 0.6$, $\alpha = 24$ の場合 $f = 1.0$ と判断されこきた。

$f = 8$ 電子数 $/8c = 8f/\alpha$, また $m = 8$ 電子数 $/K/c = (1-f)\alpha$ とする。 $1a, 1b, 1c, 1d$ はそれぞれ $f = 0.5, 0.4, 1/3, 0.2$, また f はすべて α に linear に変化し $\alpha = 24$ で $f = 1.0$ と仮定した場合である。 $2a, 2b$ は G 層が超伝導を担うと考える、その層での総電子量が α に依存し、すなわち 8 と一定ととり、その場合 $f = 0.5, 1/3$ とした場合である。 3 は K 層が超伝導を担うと考える、 K -like band が α に依存しないとし、さらにその層での総電子量が α に依存しないとし、すなわち m と一定ととり、その場合 $f = 0.5$ とした場合である。 図中の $\langle \xi_p \rangle$ はわれわれの実験で f が一定と考える範囲である。 図から超伝導の担い手は G 層と判断してよいであろう。

おわりに種々教示頂いた村尾剛氏に感謝する。

- 1) 小林, 止川: J. Phys. Soc. Jpn. 50 (1981) 3245
- 2) 小池, 弄, 柴松, 樋口, 田代: Physica 99B (1980) 503
- 3) R.A. Klemm, A. Luther & M.R. Beasley: Phys. Rev. B12 (1975) 877
- 4) D.W. Yonqner & R.A. Klemm: Phys. Rev. B32 (1980) 3890
- 5) L.G. Aslamazov & A.I. Larkin: Sov. Phys. JETP 40 (1975) 321
- 6) 小池, 田代, 弄, 柴松, 樋口: J. Phys. Chem. Solids 41 (1980) 1111
- 7) 井下, 中尾, 上村: J. Phys. Soc. Jpn. 43 (1977) 1237
- 8) 高田: J. Phys. Soc. Jpn. 51 (1982) 63

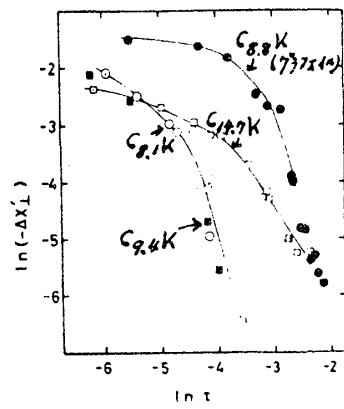


図10 酸化率 α の T 依存性

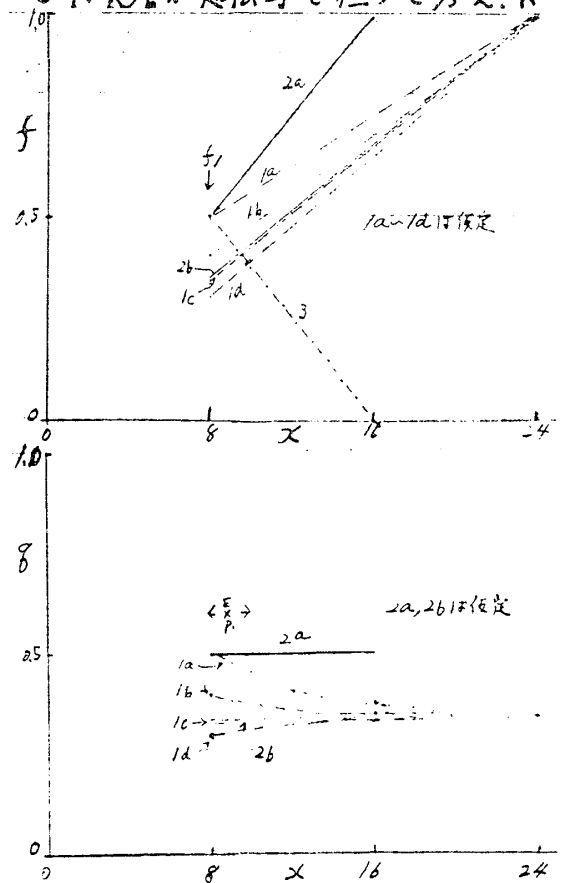


図11 f と α の α 依存性